

1975. 3. 10

普及会講演 135

ソ連・モン ゴル・中国 をまわって

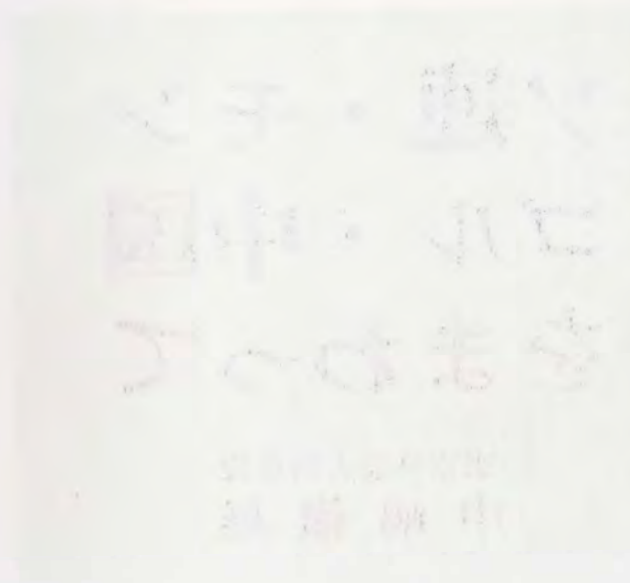
東京外語大助教授
中嶋嶺雄

社団法人 外交知識普及会



東京外語大助教授 中 嶋 嶺 雄

昭和11年長野県出身 35年東京外語大中国科卒 40年東
大大学院国際関係論課程卒 1966年文化大革命下の中国
を訪問 69年秋～71年春外務省特別研究員として香港留
学 71～74年内閣官房長官および外務省諮問機関の国際
懇談会委員兼世話人などを歴任 昭和48～50年度文部省
海外学術調査「国際環境の基礎的研究」プロジェクト団長



ソ連・モンゴル・中国をまわって

中 嶋 嶺 雄

とき 昭和五十年二月二十一日
ところ 大分文化会館

私は昨年十二月から本年一月中旬まで、ソ連、モンゴル、中国という社会主義三カ国を訪れ、しかもユーラシア大陸の東に位置するこれら三つの社会主義国の国境地帯を越えて、先週、北京から日本へ戻ってまいりました。私のように中国を研究し、中ソ関係を研究している者としては、一度、中ソの国境地帯に入ってみたいというような希望、夢があったのですが、ご承知のような緊張状態なので、なかなか簡単にそこへ行くことはできません。今回の私の旅行は、文部省の科学研究費による国際関係に関する海外学術調査の一環として行われたのですが、これら三カ国にそれぞれ一週間ずつ滞在し、そしてこれら三カ国を縦貫してまいったわけです。

何しろ今日、中ソ関係、中蒙関係はご承知のような状況なので、私のような専門研究者が三カ国を同時に訪れ、しかも国境地帯を縦貫できたことは、おそらく中ソ対立下では日本の研究者で初めてのことだったらしく、皆からも驚かれましたが、私の旅行自体も、それだけに非常に厳しいものがあつたわけです。

まず旅程に沿って申し上げますと、モスクワに一週間滞在してソ連の中国研究者と交流したあと、一月元日にモスクワからシベリアへ飛び、イルクーツクに行こうとしたのですが、厳寒のことゆえ、飛行機が予定どおりに飛ばず、イルクーツクまで行く間に、オムスクで小休止し、イルクーツクにはその日に降りることができず、バイカル湖の北西二五〇キロのブライツクというところに降りて、寒い空港で一夜をすごしました。翌日、イルクーツクを経由して、モンゴル人民共和国の首都ウランバートルに入ったわけでありました。モンゴルはご承知のとおり、ソ連と中国という巨大な社会主義両大国の間にある内陸国家ですが、日本では意外にモンゴルのことは知られておりません。今日モンゴルが社会主義人民共和国であることさえも、十分認識がないようですので、ましてやモンゴルの建国の雄であるスフバートルとか、今日のモンゴルの指導者ツェデンバル首相の名前を知っている人は、非常に少ない

のではないかと思います。しかし、去る七二年二月に日本とモンゴルとは国交を樹立して、昨年には日本の大使館もウランバートルに開設され、大使以下数名のスタッフがいるわけです。それ以外の日本人は、まだ商社の人も、新聞記者も、だれもいないという状況であります。

私は信州生まれですので、寒さには割合慣れていますが、それにしても冬のウランバートルは寒い。夜間は零下四〇度ぐらい、日中でもお天気はいいんですが、零下一五度ぐらいですから非常に寒い。

そのようなモンゴルに一週間滞在しまして、それから北京まで三日間にわたる汽車の旅で国境を越えました。日本の地図には、国境地帯一帯をゴビ砂漠と書いてありますが、正確に言いますと、ゴビとは砂漠というモンゴル語ですから、ゴビ砂漠という固有名詞はありません。砂漠が幾つかの地域に分かれていて、何々ゴビ、何々ゴビと呼んでいるのです。このゴビ砂漠を越えて、今度は中国領の内モンゴル自治区に入り、集寧、大同、張家口を経て万里

の長城のある八達嶺から北京にはいるわけです。北京にも一週間滞在して、つい先週、上海経由で帰ってまいりました。

もとより今日の中ソ関係からして、あらかじめ日本で、これら三カ国を通過するビザを取得することはほとんど不可能だと思います。私の場合、モンゴル入国のビザをモスクワととり、中国入国のビザをウランバートルでとったわけで、これも普通なかなかな簡単ではないのですが、幸いにしていろんな方々のご協力を得て、こういう貴重な体験旅行を行うことができました。

以上のような旅行日程をお話ししたうえで、私の幾つかの感想を申し上げてみたいと思います。

強いソ連人の消費へのあこがれ

まず今日のソ連についてですが、一口に言いまして、ある意味で日本人がいま批判の対象にしているようなことが、ソ連の人たちにとってはたいへん憧れの的であると言ってもいいのではないのでしょうか。

私自身、ソ連は四年半ぶりです。考えてみますと、この四年半の間に、ソ連は、たとえばモスクワのカーリーニン通りなどの目抜き通りをとりましても、ソ連の人たちの着ているもの、女性の服装だけではなく、男性の服装も非常によくなっている。それからデパートなどの品物もかなり豊富になっていることは事実ですが、それにしてもわれわれ自身が最近批判の対象にしつつある高度な消費生活、物質的な富の豊かさへのものすごい憧れがあることを改めて痛感させられました。ソ連は、よく語られるように、社会主義の計画経済でありながら、実際には特に消費面において欠乏が多かったわけですし、そういう消費へのあこがれを、ようやくソ連の人たちが赤裸々にあらわすようになった段階だと考えていいのではないかと思います。

— 7 —
最近、日本では、いわば物だけの豊かさに対する批判が非常に強いのですが、社会主義の

先進国であるソ連の方が、逆に物の豊かさ、消費の多様性を今求めている。

驚いたことに、ちょうど新年でしたので、日本のカレンダーがたいへんな人気でした。日本のカレンダーは、ソ連の人にすれば非常に綺麗なのです。それでかつてのナイロン・ストッキングにかわって、カレンダーとウオツカがあれば、ソ連で通用しないことはほとんどないといわれていました。一般のソ連市民はウオツカがなかなか手に入りませんから、水道を直してもらうにも、普通に頼むと二週間もかかるのが、ウオツカがあると、すぐに水道が直るわけです。カレンダーなどは、商社はもうその効用を十分知っていて、ヌードではちょっとまずいから、セミ・ヌードぐらいのソ連向けの美しいカレンダーをみんなつくっている。たまたま私が乗っていた飛行機にもある商社の出張員がいて、カレンダーをたくさん持ち込んでいます。それが空港で二、三割抜かれてしまう。抜かれるのは、税関吏が検査と称して、みんなとってしまおう。彼らがほしいからとるのであって、決して違反しているとか、そういうことではない。そのうえ、彼がカレンダーをたくさん持ち込んでいることがわかる

と、グランド・ホステスの娘さん、インツーリストのおばさん、事務員、みんなが寄ってきて、一枚くれ、くれというので、見る間にそのカレンダーの数が減っていく。この日本製カレンダーへの渴望という事実は、小さなことながら、非常に多くのことを物語っていると思います。

ソ連への旅行は、必ずインツーリストという国营旅行社を通すのですが、何をやっても待たされるんです。私は、ソ連は“ウェーティング・ソシアリズム”、あるいは“ソシアリズム・フォー・ウェーティング”の国だと以前に書いたことがあります。われわれ日本人の感覚では、イライラする、腹の立つことばかりです。インツーリストのサービス・ビューローへ行っても、自分に関係がないとわかると、隣にその係の人がいても、その人を教えてくれません。今回もそうでしたが、飛行機がまずモスクワに着かずに、レニングラードに着いてしまった。なぜレニングラードに着いたか、そして、いつモスクワに向かうのかという説明もなくて、一晩空港で待たされた。以前もやはりそうでしたし、いつもそうなんです。こ

れなどはソ連社会特有の一種の官僚主義と申しましようか、ノルマ制の矛盾によるサービスピ精神の欠如のいい例ですが、その場合でもカレンダーとウオツカがあると、たちどころに問題を解決するという現実があるように思われます。

一方、今日のソ連社会は社会主義、あるいはマルクス・レーニン主義のイデオロギー、つまり社会主義社会の理念と現実の生活実態とのギャップをいたるところであからさまに示しているわけですが、むしろ民衆の側には、このイデオロギーからの解放への欲求が非常に根深いように思います。テレビにしましても、私はちょうど元日をソ連で迎えたものですから、そういう体験をしたのですけれども、ブレジネフの演説が始まると、テレビを見ていたホテルの人たちも、テレビを切ってしまう。これが偽らざるソ連の素顔であります。

そういうソ連は、内政的にある意味での大きな転換期にさしかかっているように思います。一つには、いわば社会の底流を流れる西欧化への衝動というものと、最近一部に目立つ新しい締めつけ、ソルジェニーツィンの問題などにあらわれているように、イデオロギーな

り、タテマエの強い教化によって、ソ連社会を規制しているという、そういう力との間の矛盾なりギャップを、今後どういうふう処理してゆくのかといった問題がそこにあるわけです。

伝えられるところによると、ブレジネフ体制なり、ブレジネフ個人も、このところ病気であるとか、あるいは政治的な病気であるとか、どうもパツとしない。軍部のタカ派、あるいは政治局内部のタカ派が、かなりブレジネフをつき上げているというふうなことも言われておりますけれども、どうもそういう状況の中に今日のソ連があるような気がいたします。

それからもう一つ感じたことは、そういう脱イデオロギー、あるいは消費生活への渴望のなかで、かつてのフルシチョフ時代への回帰と申しましようか、フルシチョフの時代への追慕の念が強いように思われたことであります。このことは今のブレジネフ体制のソ連のもとでは禁句ですが、そういう潮流が明らかに見えることでもあります。有名なノボデヴィチ修道院墓地に、フルシチョフの非常にりっぱなお墓ができて、日曜日に行ってみますと、そ

のフルシチョフのお墓に庶民がみんな詣でているのですが、このようなこともそうした潮流の反映であるような気がいたします。

いずれにしても、ソ連はたいへんな国でして、いわばテコでも動かないような官僚的なシステムと、他方、たとえばポリシヨイのバレエであるとか、私もモスクワのコンサート・パトワールでモスクワ・フィルの音楽を聞きながら新年を迎えたのですけれども、そういうものに見られる芸術的な完璧性と繊細さを知ったとき、同じロシア民族がどうしてこうも違う顔を持つのだろうか、という気がするぐらい、そのギャップが大きいような気がいたしました。

三レベルの対立が折り重なる中ソ関係

一方で、今ソ連は中国を目の敵にしているわけであり、中国に対するソ連の感情がいかに苛立つているかは、次のような例からもわかるのではないでしょうか。

私、今回、ノボデヴィチ修道院の墓地に行きまして、雪の降る中をフルシチョフのお墓へ行ったのですが、そこへ行った目的は、実はフルシチョフの墓を見るためではなく、王明の墓を探すためでした。王明と言っても、あるいはご存じない方があるかもしれませんが、今日、中国の文献を読みますと、陳独秀、李立三、王明、高崗、劉少奇、林彪と書かれており、つまりこれまでの中国共産党の裏切り者であり、代表的な反革命分子ということになっておりますが、その王明のことです。一九三〇年、中国共産党においては、李立三路線が後退した後で、王明、博古という、ソ連に留学した留ソ派グループが主導権を確立したことがあります。こういう状況のうちに、一九三五年に毛沢東は遵義会議で初めて党内主導権を確立するわけですが、この王明の影響は非常に後々まで中国共産党の中に残ります。王明自身も、いまから一〇数年前の八全大会では、中央委員に選ばれていたのです。一説には劉少奇がソ連に逃がしたという説がありますが、王明はコミンテルンの中国代表としてソ連にとどまり、実際には亡命、形式的には常駐するような形になり、一貫して親ソの立

場をとりつづけ、最近まで毛沢東批判を行っていましたが、昨年三月にモスクワで亡くなりました。

この王明のお墓が、ノボデヴィチ修道院の一面に非常にりっぱに造られている。ご承知のように、このノボデヴィチに墓ができるということは、フルシチョフの墓もこの間までなかったのですから、たいへんなことで、いかにソ連としてはこの王明を重視していたかがわかるわけです。もしも時代が時代ならば、おそらくソ連の影響力のもとで、王明が中国の最高指導者になり得た人物ではありますが、結局、彼は、その夢を果たせず、モスクワで没した。

ここにも見られるように、中ソ関係は、そう簡単に和解できると考えるわけにはいかないように思います。中ソ関係を考える場合に、従来から、俗には党の対立、イデオロギーの対立があって、その結果、国家関係の対立があるのだから、イデオロギーの対立はなくならないが、国家関係の対立は、状況次第によっては変わり得ると新聞などが盛んに書きます。そして中国の指導者も、ソ連の指導者も、イデオロギー論争は続けるけれども、国家関係、外

交関係は正常化したいというようなことをしばしば強調します。

確かに現象的に中ソ関係を見ていくと、そのとおりでありまして、やはり中国もソ連も、国際政治のパワー・ポリティクスの論理を、社会主義国同士でも用いるわけですから、たとえば日中関係などが非常にまぶしくなったり、米国と中国の関係がなかなか進まないというような状況のもとでは、一定程度、中ソ関係が外交レベル、国家レベルにおいて改善され得ることを忘れてはならないと思います。しかしより根本的には、中ソ関係をもっと深いところで考える必要があるように私は思います。

そのことを少し整理してみますと、まず第一には、ロシア民族対漢民族の対立として、中ソ対立をとらえざるを得ないこととあります。私はこのことを Nation-to-Nation Conflict ということばで表していますが、この対立はある意味では、近代以降、中ソ両民族が接触して以来、一貫して存在してきているわけで、その間、社会主義になったり、中ソ友好同盟条約などが表に出たために、国際主義的な階級の論理によって、つまりインターナショナル

ムの論理によって、民族の矛盾や対立は解消されたかに見えましたが、実際にはそうではなかったわけです。中ソの一枚岩的な友好時代もそうであり、特に一九五〇年の中ソ友好同盟条約などについても、今日いろんな資料が明らかになってきておりますが、この条約の交渉をめぐる、スターリンと毛沢東がいかに反発し合ったかが明らかになってきています。これがまず第一の、最も根深いレベルの対立であります。

第二の対立は、いわば国家対国家の対立だと考えていいわけです。先のネーション対ネーションの対立は、いわばナショナリズムの対立ですが、双方とも近代国家を形成し、そして片方にはスターリン主義、そしてフルシチョフ路線、あるいは今日のブレジネフ体制、他方には毛沢東主義というようなものが形成されるに従って、従来の非合理的な民族的対立が、イデオロギーによって裏打ちされることになりました。そのことによって、中ソの関係は国家対国家のエゴイズムの対立、国益上の対立としてますます抜きさしならぬものになったわけであります。これを私は *State-to-State Conflict* と呼んでおります。

三つ目は、イデオロギー論争、あるいは党の対立、*Party-to-Party Conflict* と言ってさすわけで、実はこの次元の対立は一九五六年のソ連共産党二〇回大会以来、表面化して今日に至っているわけであります。

今日の中ソ関係は、以上のような三つのレベルの対立が、まさに重層的に折り重なって三位一体になっておりますので、非常に和解除がたいのですが、私はその第三番目の党と党の間での対立は、意外に急激に変わる可能性があるというふうに考えておいたほうがいいように思います。ちょうど日本共産党が、しばらく前まではほぼ完全に中国路線であったのが、急激に毛沢東を批判する立場になったことにも現れるように、党と党のイデオロギー論争や、戦略・戦術上の対立は非常に変化しやすいものだとこのことを考えておく必要がある。

それはなぜかといいますと、一つには、特に中ソ関係の場合、お互いに中国、ソ連にどう対処するかが、たちまちそれぞれの党の党内闘争と非常に密接な関係を持ってくるという宿命があることであります。先に王明の例をあげましたが、私は林彪が親ソ派だったという今

日の中国共産党の規定には賛成できません。しかしそういうことが言われざるを得ないような状況がすぐ出てくる。ここにも見られるような党内闘争の推移によって、党と党との間の中ソ関係は大きく変わり得るといえることが一つ。

第二には、リーダーシップの交代によって、急激に中ソ関係が変わり得るわけですから、この点もやはり考えておく必要があるのではないか。現にソ連では、毛沢東亡き後に中ソ関係が改善される可能性を非常に待ち望んでいることを、私は今日、ソ連の学者と交流して改めて痛感いたしました。もしも万が一、毛沢東、周恩来亡き後、鄧小平が全面的なリーダーシップを握ったとすると、おそらく中ソ関係が改善される可能性が大きく出てくるのではないかとも思えます。確か鄧小平は一九六三年にモスクワへ行きまして、中ソ会談では、ソ連共産党の論客スースロフとわたり合いました。しかしながら、鄧小平の対ソ観は、理論闘争のわく内でソ連と論争しようということであって、毛沢東のように、ソ連とは一切戦線を組まず、まさにソ連指導部を打倒し、抹殺しなければいけないという考え方とはずいぶん違っ

ているように思います。ですから、むしろ鄧小平は、当時の日本共産党と同じ路線に立っていた実権派であったわけです。日本共産党は、そういう毛沢東の主張についていけなくなつて、一九六六年春に中国共産党とたもとをわかちました。そういうことからしますと、今日、日本共産党が、毛沢東一派と言いますが、鄧小平、あるいは実権派だった劉少奇を決して批判していないのと同じように、もしも鄧小平ないしは鄧小平的な人物が全面的なリーダーシップを握ったら、ソ連や日本共産党との関係が改善される可能性は大いにある。こういうふうな問題を考えますと、中ソ関係をそう単純に見るわけにはいかなないと私は考えております。

大きな意味持つ緩衝地帯・モンゴル

私が今回、この中ソ関係の最前線を回ってきたのは、実は中ソ間の最も深い対立としての民族的対立が、中ソの間に存在する広大な中間地帯、つまりモンゴルの存在によってより根

深いものになっているのではないかという私自身の仮説を現地で確認するためでもありました。中ソの中間地帯としてのモンゴル民族の居住空間は、今日のモンゴル人民共和国、いわばかつての外蒙古には限られません。今日のソ連領ブリヤート自治社会主義共和国もそうですし、中国領内モンゴル自治区もそうであり、さらに今日では黒竜江省にはいつておりますが、かつてノモンハン事件で知られたハイラル周辺のホロンバイル地方、それから山西省をかすめて新疆ウイグル自治区に至る地方まで、モンゴル人は今日でも居住しているわけです。

そしてかつてモンゴル民族は、たいへんな遊放騎馬民族としてジンギスカンに象徴されるような大帝國を築きあげました。しかしながら今日では、いわゆる外蒙だけが独立国家を形成している。これはモンゴル民族にとっては非堂に悲しいことでしょう。考えてみますと、モンゴル民族は、ある意味では分断され、いわば民族の統一的な居住地を持たない現状が、固定化されようとしているわけでありませう。そうであるだけに、この地域は、清朝の時代、ロシアのツァーの時代から、常に中ソの力のぶつかり合い、あるいは策略のぶつかり合いの

拠点になったわけでありませう。

ツァーのロシアも、スターリン時代のソ連も、モンゴルを自國の影響下に支配しようとい貫して考えてきたことはいままでもありません。一方、中国はというと、毛沢東は、一九三六年にエドガー・スノーと会見したときに、中国革命が成功すれば、モンゴルは中華連邦の一員になるであろう、つまり中華人民共和国に加わるであろうといふことを言いました。今日モンゴルへ行きますと、毛沢東はそれほど野心的である、モンゴルさえも自分の領土へ入れようとした、ということを言いますが、これは単に毛沢東のみならず、今日の台湾の蔣介石政権も、依然として政府の中に外蒙を担当する部局があるほど、自分の國だといふふうに見ているわけです。一方、ソ連の側からすれば、毛沢東は単にそういう野心を持っていただけじゃなくて、最近亡くなったオットー・ブラウンといふかつてのコミンテルンの中国アドバイザーが最近出版された回想録でいつているように、抗日戦争の時期に、いわば日本軍との闘争にソ連を引き込みようとして、人民解放軍を今日の外蒙の地に進めようとしたとの意見

も出はじめています。それは実は、そこに非常に流動的な状況をつくることによって、ソ連をそこに引き込もうとしたんだということを、批判しているわけです。

考えてみますと、モンゴルの独立運動、あるいは自治運動には、日本もいろいろ関与してきましたことはご承知のとおりであり、いわゆる満蒙政策の一環として幾つかの政策がとられ、ある意味ではそこに賭けたロマンチストもいましたし、馬賊や大陸浪人がそこに跳梁したという歴史もあるわけですけれども、ソ連のほうも、モンゴル人の悲願をよそに、今日ブリヤート自治社会主義共和国になっている地域をはじめ、いったん奪った領土を決してモンゴルに返しませんでした。中ソ兩國の中間地帯としてのモンゴル民族居住地域は、歴史的にこのように流動的な状況にあったわけであります。

今回私は汽車で三日間、ずっとこの砂漠と草原の中間地帯を通りましたが、ゴビの夕日とか、かつては檀一雄の『夕日と拳銃』の舞台になった内モンゴルから、西は寧夏、東は旧満州にいたる地域一帯と同じ光景が連なっていて、そこにたまたま駱駝や羊の放牧、それを追う

遊牧民が見えるだけのこの広大な地域は、考えてみますと、中ソという巨人の間に広がる大きな絨毯であって、この絨毯を引っ張り合いっこするというような地政学的な位置にモンゴルがあるわけです。その絨毯を、今日ではソ連が自分のほうへ引っ張っている。このことはおそらく毛沢東、あるいは中国民族にとっては、非常に不満とするところであると考えるところもできるわけであります。

もう一つは、そういう流動的な状況が、中ソの間の中間地帯、緩衝地帯として存在しているだけではなくて、歴史的にモンゴル民族は、元朝として漢民族を制覇しました。あるいは同じようにモンゴル民族は、モスクワを制圧しました。それがゆえに、中国民族にとっちは、北からの脅威をつねに感じてきたわけですし、これは、万里の長城を築いて北方の夷狄を防ぐうとした、秦の始皇帝以来続いているわけですが、実際には、中国はモンゴル民族によって制覇されたけれども、ロシア民族によって制覇されたことはいらないのです。一種の歴史のイメージのいたざらといえましょうか、非常に皮肉なことですが、そういうモンゴルの中

国制覇という事実がダブって、今日のソ連の北からの脅威を、中国は感じていないのではないか。

一方、ソ連の側は、モンゴルに攻められたということ、あるいは彼らは非常にどう猛だというふうに、ロシア人は考えていたんでしようけれども、そのイメージが、自分たちの南のほうに強大な統一国家ができることを、いつもチェックしようとする民族的な衝動になったのではないでしょうか。その意味でも、中ソの関係を考える場合に、モンゴルという緩衝地帯のもつ意味は、非常に大きいような気がいたします。

今日、中ソの国境線は、モンゴル国境を含めて七四〇〇キロにわたっていますけれども、考えてみると、両方の首都は国境から非常に離れている。つまりモスクワはヨーロッパにあり、北京はアジアにあるわけです。よく中ソ緊張というので、両者が肩を並べているかのようになら考えがちですが、そこにはこういう広大な中間地帯がある。そしてまたこの中間地帯が存在することが、モンゴルが持っていた歴史的な意味と重なり合って、中ソ間の対立の宿命

性を増幅しているのではないかという気がするわけがあります。

さて、そのようなモンゴルとは、今日どういう国でしょうか。実はこの点については非常に紹介が少ないわけがあります。一般にはモンゴルといいますが、草原とパオ(包)とか、ゴビの砂漠であるとか、いわば海洋国家である日本人がロマンチズムを誘われるようなイメージとしてのみ考えがちです。たとえば、月の砂漠をはるばると、なんていう歌にイメージアップされるゴビの砂漠などを考えてみますと、まさに非常にロマンチックな対象になると思うんですが、実際のモンゴルは、それとは非常に離れた厳しい状況にあるように思われました。ある意味で、草原とパオ(包)とか、草原の革命とかいうイメージは、日本人のロマンチズムを満足させる一種の自己満足にすぎません。ということとは、モンゴルの人たちはまだまだ非常に厳しい生活をしているということです。現に品物も非常に少ない。ミルクがない。羊の肉がたくさん食べられるかと思うと、それも無い。デザートも見てまいるべきですが、ちょっと想像を絶するものです。とにかく非常に品物が少ない。特に野菜・

果物類は昔から少ないために、中国とのバターで入ったらしいミカンを買うのに行列をして、しかも一つか二つずつ買っていました。そういう状況を見ただけでも、モンゴルの生活水準の厳しさがわかると思えます。たとえばデパートの品物の値段なども、女物のちよっといいオーバーですと、六〇〇ツグルグ。ツグルグは約九〇円ですから、これは五万四〇〇〇円ですか、一般民衆の月収の五〜六倍ですからかなり高いわけです。そして女物のペラペラのカーディガンで、日本にもこんなカーディガンがあれば一〇〇〇円か二〇〇〇円ぐらいのが、一〇〇ツグルグぐらいします。それから普通の民衆はとも買えませんが、非常に初歩的な、ソ連製の小型の電気洗濯機が四五〇ツグルグというわけです。もしも、こういうものを買おうと思うと、一年間ぐらい働いたお金を、全部はたかなければいけないわけです。この点でもたいへん厳しいものがあるような気がいたします。

こういう生活上の厳しさ、つまり後進的な社会主義国の現実がそこにあるために、モンゴルでは民衆の生活実態をカメラにおさめることを許さない。私も実はモンゴルへ行きました

て、日曜日の青空市場は、まさにモンゴルの生活実態を明らかにしていますので、写真に撮りたかったんですが、絶対に撮ることはできません。それからウランバートルという都市は、三分ぐらい歩くと、隅から隅まで見おえることができますが、その都市の周りにパオが密集している。パオというと、非常に幻想的なイメージを抱きやすいのですけれども、実際には決してそんなものではありません。そういうパオの密集地はもちろん写真に撮ることはできない。これを撮りますと、たいへんなトラブルになります。オーエン・ラティモアという世界的に著名なモンゴル学者がおります。彼はモンゴルを愛情込めて世界に紹介している碩学ですけれども、ラティモアでさえも、モンゴルのその日常生活、青空市場などの写真が撮れないわけがあります。

そういうわけで、青空市場に行きますと、板を並べてその上にこわれたのを直したような古いライターとか、靴の片方とか、ビンとかコップというようなものが、三、四点ずつ並んでいて、そこに人が群がっています。自分の家で作ってきた手づくりの斧とか、火を入れ

て運ぶ十能とか、そういうものが売られたり、物々交換されているわけでした、社会主義の理念と実際のモンゴルの生活実態をどうふうにか考えたらいいか、私はつくづく考えさせられました。もともと草原の牧民であった彼らにとっては、このような生活を厳しいとは思えないのかもしれませんが……。

圧倒的にソ連の影響が多いモンゴル

生活上の厳しさとともに、今日のモンゴルはイデオロギー的にもかなりの公式主義でして、ジンギスカンをどう思うか、とウランバートル大学の学生に聞きますと、即座に、「彼は他民族を抑圧した征服者である」という答えが返ってくる。『元朝秘史』というモンゴル民族の偉大な歴史をうたった長大な叙事詩的古典がありますね。だいたいモンゴル学というのは『元朝秘史』の研究から始まったといってもいいのですけれども、『元朝秘史』についてどう思うか、と質問すると、「当時の社会を階級的に分析するための材料としてわれわれ

は考える」というのです。あの『元朝秘史』には、たとえばジンギスカンをめぐる美談、あるいはヒューマニズムと言いましようか、涙あふれんばかりのドラマ、あるいは悲恋物語がたくさんある。ほんとうはそういうものがモンゴル人の道徳律としても彼らを支えてきたはずなのに、右のような答えしか返ってこない。つまり今日のモンゴルは、モンゴル民族が持っていたような偉大なナショナリズムをあえて抑制しようとしている。そういう閉ざされた状況を私は感じただけであります。

それはなぜか。やはり圧倒的にソ連の影響が多すぎるということ。とにかく町を歩いても、行き交う外人はロシア人だけですし、国境あたりではだいたいモンゴル兵と同じくらいソ連兵がいます。これでは確かに、「モンゴルはソ連の植民地だ」という中国の主張は、外見だけ見れば当たらないわけではない。そういう状況が今日あるわけです。よくいわれるように、「モンゴルはソ連の第一六番目の共和国であって、ソ連邦の一部である」という比喩がありますけれども、私が見る限り、一六番目の共和国というよりは、むしろソ連の影響下

にある完全な衛星国です。そういう意味で、共和国よりもっとソ連の統制のもとに置かれて
いるというふうに考えざるを得ないような状況が幾つかございました。

冬のモンゴルは、夜間だと零下四〇度、日中でも零下一五度の寒さですけれど、そういう
寒さの厳しい中ですごしてきただけに、私自身の観察が厳しすぎたのかもしれませんが、や
がていつの日か、モンゴル民族自身もっと独立的な機運を持つ日がくるのではないかと思
います。

今日のモンゴルは、そういう意味で、ソ連を表向きとにかく立てております。革命の歴史
なども、われわれがいろいろな本を読んだり、研究しているところによりますと、ソ連やコミ
ンテルンは、必ずしもモンゴルの革命をはじめから全面的に支援したわけではありません。当
時の白衛軍がウランバートルを占拠したがゆえに、はじめてソ連の赤軍はそこに兵を進めた
わけで、常に中国との関係を考え、そして当時、極東共和国がシベリアにありましたし、そ
れから日本のいろいろな蒙古政策がここからんでおりましたから、そういうことを考えな

がら、ソ連自身もついモンゴルを自己の政策の犠牲にしてきたわけでありました。にもかかわ
らず、すべてソ連のために革命がなり、レーニンのために今日のモンゴルがあるとして、モ
ンゴルの独立の英雄であるスフバートルが、レーニンの教えに忠実だったとしてレーニンと
ともにたたえられているわけです。

それからもう一つつけ加えますと、モンゴルには今日、科学アカデミーの建物の前に、ス
ターリンの大きな銅像が立っております。これも実は驚いたことで、おそらく今日でもスタ
ーリンの銅像がある社会主義国は、アルバニアとモンゴルだけではないかと思えます。

そういう状況ですけれども、やはり一般の民衆の中には、ソ連に対しておそらくかつて占
領下の日本人が米国に対して持っていたような、反発以上の気持ちをもっているであろうこ
とも、いくつかの点から推察できます。指導者たちは、公式的には決してそういうことは言
いませんけれども、そんな気がいたします。

では、彼らは中国に対してはどうかというと、ソ連に対して以上の厳しい感情を抱いてい

る。ご承知のように、清朝は長くモンゴルを支配しておりましたし、その時のイメージが非常に深く残っています。そこへもってきて一九六四年に中国は、中ソ関係の中でモンゴルがソ連の方向に決定的に傾斜したときに、技術者その他を全部引き揚げてしまいました。今日中国へ行きますと、ソ連はいかにひどいか、援助を途中で中止して技術者をみんな引き揚げてしまったと言うんですけれど、モンゴルに行きますと、その座標軸が一つずれて、中国は援助を途中で中止し、技術者もみんな引き揚げてしまって、約束違反である。いかに中国のやり方がひどいかということを、しきりに言うわけです。それはある意味で、清朝の支配からの独立、いわば反漢反清運動というものが現代のモンゴルをつくった、その歴史によるものだと思いますけれども、とにかく対中感情は決定的に悪い。そのように中ソの谷間としては非常に厳しいんです。

ましてや私みたいに、これから中国へ行くということになりますと、敵地に行く裏切り者であるというような扱いを受けざるを得ないわけです。現に私自身が国境を出るために、税関で大変厳しい検査に会いました。乗客は二人だけで、一人はブルガリアの外交官でしたから、検査の対象となるのは一人ですから、私のコンパートメントに七人入ってきました戸を閉められ、ほんとうに隅から隅まで検査されたあげく、二時間ぐらい油をしぼられ、ようやく最後に、例外措置としておまえを中国に出すというわけです。私はちゃんと中国行きのビザを持っているわけですが、それは通用しない。中国がどういふビザを発行しようと、われわれには一切関係ないというわけです。一時は、せっかくここまで来たのに中国へ出境できないのではないかと思っただけですが、最後に私は日蒙友好の必要性を強調して、ようやく握手して中国へ出ることができたのです。

しかし、考えてみますと、モンゴルは、近代において中ソの谷間として、それほどまでに踏みじられてきたことが、そういう彼らのかたくなな姿勢をつくっているのではないかと思えます。今日、モンゴル民族はあちこちに分散しておりますけれども、それがかつて一時

期存在したような全モンゴル民族の統一、いわば汎モンゴリズムというような方向が可能かということ、私は現地を見てきて、それはきわめて非現実的なことだと思いました。なぜかという、いま内モンゴルのほうは、国境を越えればすぐわかりますけれども、完全に漢人化しており、いわば完全な中国人の統制下にあるわけです。その変化の大きさは、国境を越えれば歴然としているように思いました。

さて、そういう経験を幾つか経てきたわけですが、昨年十一月、『デーリー・テレグラフ』という英国の新聞が、モンゴルの国境地帯で五回も中ソの衝突があったと言ひまして、日本の新聞もずいぶん取り上げました。これについては、中国もソ連も公式に否定いたしたね。私の見た感じでは、一旅行者として一つの線のうえを走ってきただけです。あの広大な領域の全体はわかりませんが『デーリー・テレグラフ』のいうような状況を感じさせるものはほとんどありませんでした。国家関係は悪いけれども、もしもそういう実際の戦争につながるような紛争なり緊張があるならば、おそらく私はここを通ることができなかつ

たでしょうから、その点でも非常に平静だったように思います。もとよりモンゴル側は、チヨイルとか、サインシャンデとか、ザミンウデといった駅の周り、特にサインシャンデの辺には、ソ連の基地が汽車からも見えますし、走っているのはだいたいソ連の軍用トラックで、兵隊はソ連兵とモンゴル兵が半々ぐらい、駅頭にもソ連兵が常にいるわけで、非常にソ連が入っていることがわかります。それからバラボラ・アンテナというんでしょうか、そういうようなものがたくさんあって、リーダー基地なんか明らかに見えますけれども、それはいつもそうであって、すでに恒常的なものになっているわけです。そのことだけでは、いまそこに軍事緊張があるというふうには感じませんでした。

中国側にはいりますと、内モンゴルでは、人民解放軍の姿はほとんど見かけませんでした。

そういう状況を経てきましたが、もう一つモンゴルについてお話しすべきことは、林彪事件についてです。ご承知のように中国側は、十全大会の周恩来の報告にもあるように、林彪

は毛沢東暗殺計画を企てて、それが失敗するや、英国製のトライデント機に乗ってソ連に逃亡しようとしたが、燃料が尽きて、モンゴルの奥地のウンデルハンで墜落死したといっていますね。地理から言いますと、そのとおりの位置にウンデルハンがあり、それはモンゴル東部のちょうどまん中にあります。しかしながら、モンゴル側に行って聞いてみますと、林彪は絶対にモンゴルで死んでいないと主張いたします。ソ連も最近そういう見解であります。中国へ行きますと、モンゴルで死んだと言うけれども、モンゴルでは、林彪は乗っていないという。飛行機が落ちたことは事実であり、中国側が、林彪が乗っていたという飛行機の残骸はいまでも砂漠に散らばっているとのこと。ただモンゴルは、東部一帯は外国人が一切立ち入りできませんから、その辺の状況はわかりません。

「脱政治」のふん囲氣が強い中国の一般民衆

モンゴル側の税関でしぼられ、やっとの思いで中国にはいったためか、中国にはいったと

たんに、いわば空氣の希薄なところから普通の空氣のところに来たように、ホッといたしました。二連という駅が中国側の玄関口ですけれども、駅に着きますと、駅長をはじめ、辺境防備の警官などが、私を貴賓室みたいなところへ通しまして、お茶を勧めてくれたりして盛んに歓迎してくれるのです。モンゴルで私が厳しくチェックされたので、乗っている三人の中国人の服務員は、その当時から私を“味方”と思って、モンゴル側の兵隊が来ると、目くばせしたり、舌打ちしたり、とにかく私に精神的な支援を送ってくれたわけです。

こうして私は中国へ入境し、さらに一日半を汽車で北京に向かったのですが、北京に着いて気がついたことは、途中から一等寝台車がもう一両連結されていたことです。夜中ですからちょっとわかりませんが、たぶん集寧あたりだったと思います。それは全国人民代表大會の代表が地方から乗ってきたと考えることもできるわけで、私が北京にいるころ、すでに重要な會議が開かれているらしい兆候ははっきりしておりました。人民大會堂の周囲にもしばしば行ってみましたが、番兵が非常に多いし、電氣がいつも人民大會堂の一角についてい

る。外国人はほとんど行かない下町で、「全国人民代表大会の開催を迎えよう」と書かれたステッカーが糊あとも生々しくはり出されたばかりであるところも目撃しました。

ところで、私にとって中国は八年ぶりであります。前回は一九六六年の秋で、まさに文化大革命の紅衛兵運動が一番ピークのとき北京へまいりました。そのときは全国各地を回ったんですけれども、いわば激動の、そして熱狂のるつぽであった当時の中国に比べて、今日の中国はなんと静かなことか。第一、歌や踊りで、毛沢東語録を紹介したり、スローガンを斉唱したりして毛沢東をたたえる光景には、今回、一度もぶつかりませんでした。「批林批孔」運動がいま広がっているので、さぞかしそれが大衆を熱狂的にとらえているかと思っただけでしたが、全く逆でした。そういう学習をしているところなども全然見当たりませんでした。「批林批孔」運動は、最近非常にスコラ的な論争にもなっているので、やはりこれは幹部とインテリの間の問題でしかないという気がせざるを得ないわけがあります。

一般民衆はどうかというと、これはまたソ連とは違った意味で、生活派といいたくしょうか、「政治第一」をあれほど鼓吹した中国でさえも、今日では完全に「脱政治」のふん囲気が強いのです。日曜日に頤和園に行ったり、故宮博物院を見たりしますと、どこに「批林批孔」や文化大革命があるかと思われる状況です。

服務員なんか見ておきますと、以前は、時間があれば毛語録を朗読したり、学習をしておりましたけれども、今回はひまがあるとみんなトランプをやっている。そういう中国の變化に、私は非常に驚きました。

同時に驚いたことは、モンゴルからはいったからかもしれませんが、この八年間で、市場にしてもデパートにしても、非常にものが豊かになっていること、これは疑いありません。それから八年前に比べて、自転車も新しい自転車がふえて、きれいになっている。人民服も、単一の人民服ですけれども、非常にいい人民服を着ていましたし、とにかくいわば民衆の表情が平生のものになっていて、そういう点で生活面での大きな向上が見えるように思われます。

ですから逆に、手鼻をかんだり、痰を吐いたりする人が、非常に目立ってきまして、やはり中国人は中国人だなという感じがする。そのことも一つの正常化といいたまうか、あたりまえのようになっていくわけです。こういう感じを非常に強く受けただけであります。

このような現実こそ、今回の全国人民代表大会に反映されているのではないのでしょうか。つまり憲法ではプロレタリア独裁をうたい、『人民日報』は毎日、「批林批孔」運動を唱えているわけですが、われわれはその点からのみ中国を判断したら大間違いで、それはいわば中国の政治的世界のドラマにすぎないのであります。しかも日本人と中国人は、伝統的に政治に対する考え方が違っていているわけで、日本人は地方政治から中央の政治に至るまで、あるいは小は町内会のことから、大は国家外交に至るまで、政治というものがすべてを解決するんだという神話にとらわれすぎているために、政治に対する期待が非常に多い。ですから、インテリなどは、政治を批判しなければインテリではないというような顔を日本ではしているわけです。ところが中国人は、政治をそういうふうに考えていないのではないかと。政治の世

界は、まさに権謀術数うず巻く三国志の世界であるというふうを考えているわけで、それと自分たちの生活とは、そこに大きな隔たりがあって、生活はまさに生活として、ぎりぎりに生活の知恵を働かせながら、地縁血縁をはじめ、一種の共同体的な状況の中で、それを防衛していくというのが中国人の政治観ではないか。ある意味で、徹底的な政治不信が、伝統的に中国人の中にあるような気がするので。

ですから毛沢東が、林彪が後継者だから、みんな林彪に万歳せよ、と言えば、林彪に万歳する。そして今度は、林彪は反革命だ、と言えば、みんな林彪は反革命だと言うのですが、指導者の理念と民衆の政治観がもし完全に一体化していたならば、とてもそんなことはできない。毛沢東自身の責任はどうなるのだという追及が必ずあるはずですけど、それがそうならないということは、いわば文化大革命、「批林批孔」運動に象徴されるような政治は、まさに中国社会的の上層部の政治権力社会の一種の上積みとして存在するわけで、その底辺といえますか、社会には、素顔の民衆が存在するというふうに考えたほうがいいのではないかと

と、私は見るわけです。

政治的にも脱文革、脱政治を反映

日本の新聞などを読みますと、中国がそういうふうになる、品物が豊かになったのは、まさに林彪を批判し、文化大革命をやったおかげだというけれども、はたしてそうかという疑問は残ります。もうどうしようもないブルジョア社会になっていると中国が批判するソ連だって、四年半ぶりに行ってみますと、非常にものは豊富になっておりますから、文化大革命や林彪事件がなくても、八年の差というのは、この進歩の速い時代にはどこの国でも大きな変化があるのは当然で、その辺の結論は早急に出しすぎてはいけません。

しかも今回の全国人民代表大会を見ますと、憲法は、毛沢東路線を反映して勇ましいことを言っていますが、これまでの憲法がそうであったように、それは結局たてまえに終わるのではないかという気がします。しかも今度の体制は、ともかく毛・周の健在な時代は、いわ

ばすべての政治を休戦して、大衆のレベルにおける脱政治に合わせた形での、一種の官僚的なシステムの再確立、いわば実務的な能力のある指導者がやはり実権を握っているということになるわけです。周恩来にせよ、鄧小平にせよ、張春橋にせよ、非常に実務的な能力のある人です。これに対して、イデオロギーだけを唱えていたような、文革派のラジカル、つまり江青夫人以下、王洪文、姚文元、汪東興、李徳生というような人がほとんど目につかなかったのは、このことを反映していると思います。王洪文が中国共産党十全大会（一九七三年夏）であれほど鼓吹し、「批林批孔」運動のスローガンでもあった「反潮流」という言葉が、今回はまったく消えてしまったことも注目しましょう。

今度の憲法によって明らかのように、中国は、今までは形の上では複数政党制をとっておりましたけれども、今回は中国共産党の一元化指導ということで、完全な一党独裁体制が名実ともに達成されたわけであります。そうしますと、やはり、党というのが非常に重要になるわけですが、その党の中で重要な地位を占めている王洪文や、姚文元や、江青夫人が、い

わば国家の体制の中で前面に出なかったということは、まさに脱文革、脱政治ということの政治的な反映の一つではないかという気がするわけでありませう。

「批林批孔運動」は、その出発点は非常に権力政治的な色彩が強かったわけで、そこに幾つかの問題を含んでおりました。明らかに周恩来批判も含んでおりました。しかしながら周恩来を批判する決定打を欠いていたわけで、それは劉少奇を失脚させ、林彪を失脚させ、そしてまた周恩来ということになると、中国の民衆からしても、もうたくさんという気持ちですし、ある意味では、中国にとっても重大な国家的な損失だという、そういう暗黙の合意のもとに、「批林批孔運動」は、途中、とくに昨秋から、いわば一大団結の運動になってきました。しかも周恩来批判が含まれていると同時に、双方に決定打がないわけですから、逆に毛沢東側近に対する批判のような論文の中には出ましたが、結局は、とにかく毛・周の時代をこれでいこうということになった。いわばだれもが毛沢東、周恩来亡き後の中国を意識せざるを得ない今日の中国の状況の中で、最もベストな体制をつくらうという合意のもとに、今

回の大会が終了したのではないかと思います。

そこにはもちろん幾つか問題があります。なぜあれほど秘密にしなければいけないのかという問題もあります。たとえばわれわれは外国人として観測するけれども、日本人の駐在員や、大使館の人たちは、外国人としてもすごい特権を享受しているわけですが、それらの人たちと中国の人たちとの生活レベルのあまりにも大きなギャップ、こういうものを今後、中国が国際社会との交流を深めてゆくにつれて、どういうふうに克服していくのか。ある意味で考えてみると、いよいよ中国大陸にも自由化の外圧みたいなものがひたひたと押し寄せていると見えるわけですから、そういう外圧にどう対処してゆくのかという大問題もあるわけです。

ともかく八年ぶりの中国も、私にとっては非常に印象深かったわけですが、ただ私が痛感することは、皆さんもこれから中国に行かれる機会があるかと思いますが、そのときには一時間でも、二時間でもいいから、いわば「管理された旅行」から解放されるように努力して

いただいて、自分の足と目で、たとえば北京駅前の朝陽門南小街というところをちょっと通ってみる。天安門の前から南へ向かうと、昔からある前門というのがありますけれど、その前門外あたりには人がいっぱいです。ちょうど東京の上野か浅草にあたるようなのですけれども、その表通りではなくて、裏通りをちょっと自分の足でごらんになっていただきました。そうしますと、そこには、天安門前広場とか、人民大会堂とか、北京飯店とか、故宮博物院とか、あるいは明の十三陵とか、万里の長城とか、そういうところだけで感じる威風堂々の中国とは全く違った「遅れた中国」が依然として残っているのに、おそらく皆さん驚かれると思います。私はそのことで非常に胸が痛みました。中国はまさに、中国自身が言っているように、発展途上国なんです。

私みたいな戦後派の者は、戦前の中国は知りませんが、皆さんも訪中の機会が得られましたら、ぜひ自分の目と足でごらんになることをお勧めします。

そういう意味では、まさに中国自身は発展途上国なのであって、そのことはむしろ中国人

は意外に率直に言っているんですけれど、問題は日本人の側にあるのです。中国というと、いわば自分自身の観念的な中国像に中国の現実を合わせようとする無理があるわけでして、日中の友好関係にしてみても、そういう無理の上になたてられる友好関係なら、長続きいたしません。もっとお互いに胸のうちをあげる時代をつくっていくためには、中国自身もまだまだ非常に厳しいところがありますが、同時に中国と接する日本側の人たちの態度にも、非常に多くの問題を含んでいるのではないかという気が依然としてしなくてもありません。

ちょうど時間がまいりましたので、今回の旅行の感想を交えながら、私の感ずるところを申し述べさせていただきます。

昭和五十年三月十日

印刷・発行

非売品

『普及会講演』第一三五号

發行所 社団法人 外交知識普及会

東京都千代田区日比谷公園一番三号

市政会館内(郵便番号一〇〇)

電話東京〇〇一一一(大代)・五七七二(直)

© 1975